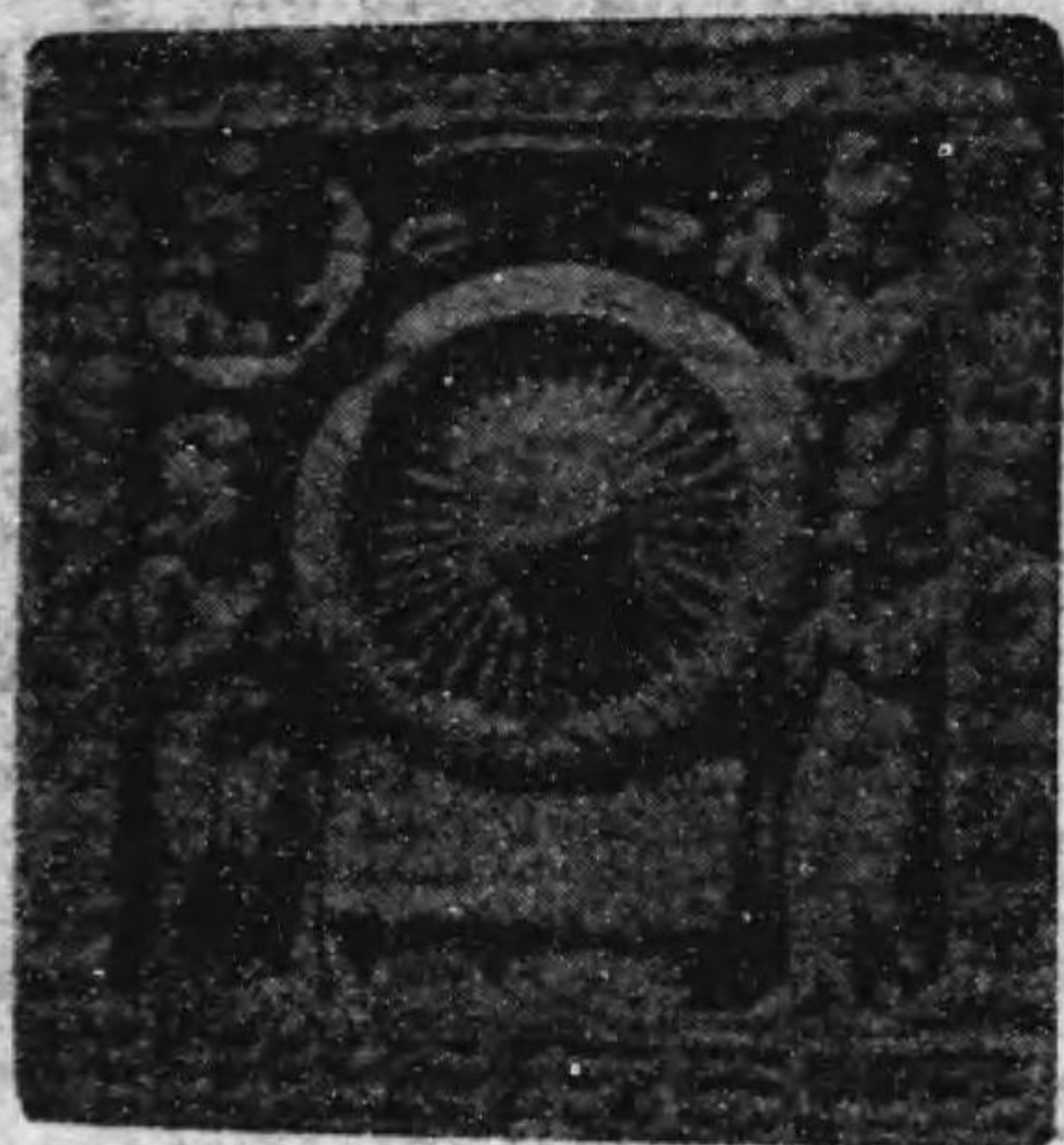


眞宗の認識と實踐

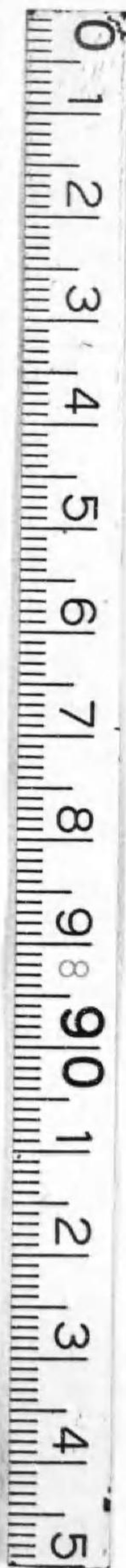
特219

7

933



本派本願寺  
佛教青年會聯合本部



始





時 219  
933



梅原真隆述

淨土真宗の認識と實踐

佛青叢書

第二輯

本願寺佛教青年聯合本部發行



### はしがき

人類永遠の使命は窮極の真理探求とそれによる現実生活への價值的充足を目指しての進展である。一葉は落ち一芽は育ち、宇宙萬物のくりかへされる生命の流轉も一切の生とし生けるもの、進み行く表現である。その進展の中に於て人は歪められない正しいまことの救ひを求めてやまない。

人類が求めてやまぬこの窮極の真理こそは佛陀世尊の教法であり、以て時代の警鐘となり人心の燈明となる宗教の最高峰であらう。まことの救ひとは人間價値の全般的批判のもとに全く計ひをはなれた如來の絶對的他力の力にある。

由來佛敎は「入り難く解しがたし」の定評のもとに無盡の寶庫が民衆に開放されず、または曲解されたまゝ人間生活の生ける指導原理として味識されない遺憾が多い。まして現代の青年生



活は複雑多岐の生活に追はれ佛教とは全く没交渉にして益々乖離するの傾きがある。

こゝに於て直截平明に佛教の要義を述記せる佛青叢書を刊行し、以てこれからの國家社會を背負ふて立つ青年諸君に眞實の生活原理の把握と信念の確立を待つ所以である。

編 者 識

### 凡 例

- 一、本叢書は佛教殊に眞宗の入門書の意味にて主要なる教義の概要を平明に説明せんとするものである。
- 一、本叢書に收められるものは本山又は本部に於て諸講師に依頼したる講演速記を講師の校閲を経たるものである。
- 一、本叢書の一切の責任は編輯發行者にあれば不備の點質問希望等は本部に申込まれたし。

## 淨土眞宗の認識と實踐

### 目 次

#### はしがき

#### 第一講……………一

眞實の宗教——宗教の批判的復興——「法の」信順と「教」の批判——「眞」と「假」と「偽」——淨土眞宗の救ひ——生と死を救ふ——富と健康と權力——聖なる生命を興ふ——人間の欲求を正せ——無碍に生きる人々——禍を轉じて福となす

#### 第二講……………三三



如實の認識と實踐——眞宗教義の基調——他力の救ひ——名號法の廻向と  
人生——嘆佛と懺悔——發願と廻向——淨土を莊嚴する——眞佛弟子のほ  
まれ

第三講……………四七

罪惡と救ひ——機の深信——法の深信——杞憂と邪見——超道德と反道德  
——耳四郎の念佛——惡魔の佛像——無碍の救ひ——往生淨土の大道——  
現實を活かす理想

隨筆……………七一

# 淨土眞宗の認識と實踐

梅原眞隆述

## 第一講

### 眞實の宗教

淨土眞宗といふのは親鸞聖人のおひらきになつた宗派に名づけたものではあり  
ますが、しかし、これはある一種の宗派といふことよりも全き宗教の眞實をみ  
き出したものであるといふ意味をもつております、つまり、眞實の宗教といふ意



味をあらはすものであります。

さて、この眞實の宗教といふことについて、いさゝか説明を加へておく必要があらうかとおもひます。

一昨日即ち十月十五日、東京の築地本願寺において宗教談話會といふのが創設せられました、その第一回がひらかれました、たまく私<sup>わたくし</sup>が東上いたしておりましたので招かれて、宗教と人生についての關係をのべて話題を提供したことであります。この會は知名の方々のお集りでありましたので、種々、有益なお話を承<sup>うけたま</sup>はることもできました。

### 宗教の批判的復興

私はちか頃<sup>ころ</sup>の宗教復興といふ機運はまことに結構なことでありますが、若し<sup>わたくし</sup> 隴<sup>ろう</sup>を得て蜀<sup>しよく</sup>を望<sup>のぞ</sup>むならば、この復興は批判的でありたい、どんな宗教でも興<sup>おこ</sup>れるはよいといふわけのものでない、眞正の宗教が興隆するやうに工夫しなくてはならぬ、漠然たる宗教の復興は國家社會の立場から云つても幸福でないし、また宗教の立場から云つてもよろこぶべきことでない、少くとも迷信を斥けつゝ、正信<sup>せいしん</sup>を興<sup>おこ</sup>すやうに各位の御盡力をおねがひしたものであるといふ意味のことを申述べましたことについて、いろ／＼の批判や質議が起るのであります。

すべての宗教はつまり同じところへおちつくのでないか、これならばどんな宗教でもさかんなればよいではないかといふ意見もできました、また、迷信を斥け



るといふけれども、迷信といへども人間の弱さに氣づいて神佛の力にすがるのであるから、まづ迷信でも興へる方がよいではないか、このうちに次第に宗教の深さにみちびく方が現実的であるといふやうな意見もあらはれたことでありました。

#### 「法」の信順と「教」の批判

そこで、私は率直に私見をのべて各位の御批判を仰いだことでありました、その私見といふのはこうであります。

宗教は結局はひとつのところにおちつくといふことは、よほど綿密に噛み分けておくべきことであります、古歌にも「わけのぼる麓のみちはことなれど同じ高嶺の月を見るかな」といふのがあります、これもほゞ同じこと、即ち、すべての

宗教は結局において同じところにおちつくことを詠んだものであります、しかしこの終局において同じといふことは、そこに批判的配列があるのであります、たいちにすべての宗教はそのまゝで同一の本質を有つてゐるといふことではありませぬ。

「法」と「教」とはしばらく分けて考へられなくてはなりません、**「法」すなはち真理は唯一無二であります、真理にふたつある筈はありません、真理に眞實と邪偽とあらう筈もありません。**「法」はたゞひとつであります。

けれども、この「法」を表詮する「教」は必ずしも同一でありませぬ、「教」とは「法」を人の生きて行く指導原則として組立てたものであります、この「法」を



「教」として組立てるときに、いろ／＼の手加減を生じて、教は差異を生ずるのであります、人の機根に相應するために「教」に種々のかたちを生ずるのみでなくて法理をあらはすことの如實と不如實によつても種々のかたちをとるのであります。

(6)

「法」はそのまゝ信受してよろしいけれども「教」はおごそかに批判しなくてはならないのであります。

### 「真」と「假」と「偽」

これについて、私たちの典範として仰ぐべきは親鸞聖人の批判であります。聖人は「教」について「眞實」と「權假」と「邪偽」との分別をあらはされました。

「眞實の教」といふは「法」の全體が如實にあらはれてゐるのであります、これは教法一致するものであります、これは危ぶげなしに信受してよいのであり、割引なしにうけとつてよいのであります。

次に「權假の教」とは「法」の部分がある一面的な立場において表詮されてゐるのであつて、しかも、この部分が全體のやうな貌をとつて居るのであります。言葉を換ていへば不完全な教であります、この不完全な教は完全な教に近づく手段となることがあります、そこで權假が眞實を掩ひかくすときは斥けられねばならず、また權假が眞實へ向ふ過程となるときは役立つものであります。

最後に「邪偽の教」とは「法」と全く背反するものでありまして、實は「教」と名づ

(7)



くべきものではないのであります、しかも、それが如何にも「眞實の教」であるかの如く偽るものであります、そして、かゝる「教」は人間の弱點につけこんでゐるので、却つて幅が利くこともあります、けれども、「邪偽」は「邪偽」として批判しなくてはならないのであります、あやまつてかゝる「邪偽」を把握することは「眞實」に向ふ過程にならないで、いよゝ／＼眞實を見失ふことになるのであります。例へば贋金をつかんで正金であると思ひこんで居るものは、何時までも正金を正金と知らず、却つて贋金のやうにあやまるのであります。

こうした道理があるによつて、眞實と權假を見分け、眞實と邪偽を取捨する必要があるのであります。ありがたいことには、私たちは見眞の聖人の御批判に

よつて、こゝに眞實の宗教を信奉することができました、ふかく感謝しなくてはなりません。

### 浄土眞宗の救ひ

さて、浄土眞宗において救はれるといふことはどうなることでありませうか。このことについては本願文に紛らふことなくはつきりと明示されてあります、即ち本願文をいたゞくと、「至心信樂、欲生我國、乃至十念」とおちかひあらせられてあります、「至心信樂」とはほとけのおまことを信受にすることでありまして、現實に佛力をいたゞくことであり、「欲生我國」とは、いつ死んでも安養のお浄土へ往生させていたゞけると要期にすることであつて、信心が來世へのあこがれを帯びる



ことであります。そして、「乃至十念」とは、うれしいにつけ、かなしいにつけ報謝のお念佛をとなへさせていたゞくことでもあります。これが、この世における信心とその相續のすがたであります。さらに、お浄土へ往生するとそのまゝ佛果を成就して、迷を轉じて悟をひらかせていたゞくのであります。眞宗の救ひとは、これにつきてゐるのであります。これ以上でもなく、これ以下でもないのであります。

### 生と死を救ふ

ところが、多くの人にはかゝる救ひをよろこばないかのやうであります。あるひはかゝることを救ひとは認めないかのやうであります。

まづ、死んでのち浄土に往生するといふことには何等の關心をもたないかのやうであります。現實の生の問題さへ解けないのに未來の死のごときは問題としないといふのであります。死のことをきくことさへ厭ふのであります。このほども放送講座において歎異鈔をいたゞきました。いろいろの反響があります。そのなかに「今の青年は死を欲せず、死について語ることはやめていたゞきたい」といつてよこされたのもありました。何も青年にかぎつたわけでない、老人であらうが幼いものであらうが、何人も死を欲するものはありませぬ、何人も欲しないけれども死はおごそかに追つてくるのであります。だから、この死をまともに見つめて救ひを示される宗教こそ誠實であります。かゝる死を無視して生のうちに



み拘束してゐることも眼ざめた生き方であるとは申されませぬ、死はさげがたい業である以上笑つて死なれるだけの覺悟を定めておくことが何よりも大切であります、このほども、文藝春秋社の座談會において菊池寛さんが佛教は平氣で死なれる覺悟をあたへると云つて感嘆してゐられましたが、これは極めて眞摯な味ひ方であると感心したことであります。

宗教において死の問題を解決しないものは、とうてい完全な救ひをかたるものとは稱せられないのであります、そして完全な救ひは死をとほして生き、生きる悩みをきりひらいて行くものであります。

さて、生きる悩みをきりひらくのが、宗教の力であり、ところが多くの人

々は信心だの念佛だのといふことは、生きるに何の役に立つかと訝るのであります、そして如來は人生を救ふ本願に信心と念佛をちかふかはりに、富と健康と權力をあたへて呉れたらよさそうなものであると、抗議めいたことを云ふ人々が、今も昔も、かなりたくさんあるのであります。

### 富と健康と權力

けれども、富と健康と權力によつて、果して人間は救はれるかどうかを、突とめて吟味しておく必要があらうかとおもひます。

まづ、金を與へる、富を與へることによつて、貧しい人々は救はれます、無産者の悩みは解消されます。けれども、こゝに新しく金持のわづらひと、富めるも



の、不安が迫つてくるのであります。金がなくても苦しむが、金があつても苦しむのである、たゞ苦惱のかたちがちがつてゐるだけのことであり、人は新しい苦惱を楽しみのやうに見違ふこともありすが、行あつてみると苦しみは苦しみであります、こんなに考へてみると金は貧しい人々を救ふけれども、全き人生を救ふことはできないのであります、どんなに金をつかんでも、人は涙にくれて悩むのであります。

まだ、病める人々には健康になることは救ひであります、萬人は健康において幸福を感じるのであります、けれども、健康な人はそれで救はれるかといふと、決してそうではありませぬ、八苦のうちに「五陰盛苦」といふことを申します、こ

れは健やかなからだを持つてゐることの苦しみであります、人生は幸福な健康を求めてゐるので、不幸な健康をもてあましてゐるのであります。

尙ほ権力にしても、そのとほりでありまして、弱いものは権力をつかんだら救はれるけれども、さらに権力をつかむと新しい不安と困憊もあらはれてくるのであります、権力階級の人々が護衛でもつけねば安心して旅もできないといふことを御覧になつても、思ひ半ばにすぎることがありませう。

これを要するに、富貴によつて貧乏は救はれ、健康によつて病人は救はれ、権力によつて弱者は救はれます、しかし、富めるものも、健やかなものも、さては強い人々も依然として苦しむ悩むとき、富と健康と権力によつて全き救ひのもと



められないことに氣づかねばなりません、これ、如來の本願にかゝるものを誓約せられなかつたわけであり、ある程度の救ひで人生を解決するの無理を敢てせられなかつた次第であります。

### 聖なる生命を與ふ

そこで、本願におちかひになつた信心とその相續する念佛の旨趣をうかゞはねばなりません、さきにのべた富と健康を相對價值とすれば、この信心と念佛は絶對價值であります。

絶對價值とは貧しくても富んでもかはらないものであります、貧しくてもいやしくならず、富んでも傲慢にならず、貧富を超えて正しく生かす力こそ信心であ

ります。

また、病氣になつたからとて行つまらず、健康になつたからとてふざけまはらず、こゝろしづかに正しい生活を愛樂して行けるのが信心の道であります。

強ければ強きまゝに、弱ければ弱きがまゝに、うつくしく生き伸びて行けるのが念佛のちからであります、涙のなかにも光り、微笑みのなかにもかゞやくのが信心のいのおちであります。私がある人におくつた歌に

ほゝるみにかゞやくいのちなみだにも

くもらぬいのちたゞへまつらむ

といふのがあります。これは信心のいのちを讚嘆したのであります。



われらの生きる素材をあたへ、若くは素材をとりかへることによつて救ひを約束せず、あらゆる素材をそのまゝうけ入れながら美しく生き伸びて行けるちからを廻向したまふところに眞實の救ひがあるのであります。

### 人間の欲求を正せ

ところが、われらは生命のめぐみをよろこばないで、生きる素材をもとめやうとしております。つまり、私たちの求めるよりも、もつと高いもの、もつと聖いものをあたへたまふので、私たちはかへつて、これを感謝することを知らず却つて不足をいつてゐるので、皮肉なことであり、いたましいことでもあります。さながら、豚に眞珠を與へたやうであり、また、猫に小判をあたへたやうなもの

であります。そこで、人間の低級にして筋みちのちがつた欲求のまへに妥協することなく、その欲求をふかめて如來のまごゝろこめた廻回をありがたく感受せらるゝほどに人間を教養し、また無理な欲求を斥けて、如法な願念に淨めることが人生を救ふ根本的な工作であります。

### 無碍に生きる人々

私の親しい方々に、もとは豊かな生活をしてゐられたのに、いろいろの手ちがひからその財産を失ふて不如意な生活に侘びてゐられます、ところが、その一家の方にはいづれも信心ふかい方々でありまして、その財産のなくつたことをかこつははりに、侘びしい生計のなかに、いよ／＼佛恩のふかいことをよろこんで



さらに、うるはしい法喜にみちた生活をおくつておられます。

その御主人は「お慈悲は財物があつてもよろこばれるし財物がなくてもよろこばれます」といつて和やかにお念佛しておられます。また、その奥さんは「あればあるやうにくらさせていたゞき、なければないやうにくらさせていたゞく、こゝに無碍のおちからがあたへられてありがたい」と掌合して生きておられます。こうしたところに「念佛者は無碍の一道なり」といふ聖人のおことばがありがたいたゞけよう。

### 禍を轉じて福と成す

いふまでもなく、私たちは禍害をとりつけて幸福になれるやうに、くらし

いものであります、これは私たちの本能のもとめるところでありまして、そうしなくてはならないのであります。

けれども、私たちの生活はかゝる本能の欲望するやうにも参りませぬ、そこにはいろいろの業縁がからみついておりまして、求める幸福はつかめず、却つて欲しない禍害が迫ってくるのであります、これが人生のありのまゝのすがたであります、そこで、私たちは幸福のなかにも溺れないで、つゞましく生かしていたゞき、不幸のなかにも、へこたれないで、ちから強く生かしていたゞくことが大切であります、こうした、幸福と不幸とをとほして、正しく生きぬくいのちこそ、本願にお誓ひくだされた至心信樂の大道であります。



このめぐまれた大道を辿らせていたやくことが何よりありがたいことでありま  
す。この現世においては佛力をめぐまれて生かされ、さらに來世は浄土に生まれ  
て悟らせていたやく、こゝに全く救はれたものゝ法悦があります。

## 第 二 講

### 如實の認識と實踐

浄土眞宗は眞實の宗教であるといふことについては、きのふ申上げたとほりで  
あります。ちか頃眼のさめかけた方には、佛敎のすぐれたことに氣づき浄土眞宗  
の深い味ひに注意しかけてきたやうで、これはよろこばしいことであります。然  
るに、眞宗の信者と稱する人々が果して浄土眞宗の尊いことを聞信してゐられ  
るのかどうか、これはいさゝか心元ないやうであります、つまらないものを掴んで  
尊いものゝやうに勘違ひしてゐることも危いことではありますが、その反對に尊



いものを傳持しながらそれに氣づかずにをることも淋しいことでもあります、尊い寶珠を有ちながら貧しいさすらひの旅にさまよふてゐるとおなじことでもあります。私たちはまづ淨土眞宗のすぐれた價値を如實に認識しなくてはなりません、さらに進んで、淨土眞宗のすぐれた教義を如實に實踐するやうに心がけなくてはなりません。

### 眞宗教義の基調

さて、淨土眞宗の教義はきのふ申上げましたとほり第十八願に示されてあります、即ち、「至心信樂欲生我國乃至十念」と示されてあります。

こゝに「至心」とあるのは「眞實」といふことであります、「眞實」といふは「如來」のことであります、如來の力が廻向せられてわれらは救はれるのであります、故にこの「至心」といふことは他力廻向の救ひを示されてあります、この他力廻向といふことが淨土眞宗においてみがき出された尊い聖化であります。

次に「信樂」とは「信心」であります、この信心は罪惡ふかき機を信じし、ありがたい法を信知するのであります、いかに罪惡ふかきものも如來の願力によつて救はるゝ攝取罪惡の救ひを信するこゝろであります。この攝取罪惡といふことは淨土眞宗においてふかめられた有難い心境であります。

尙ほ、「欲生我國」といふは、我國とは如來の國土であります、お淨土のこと、そのお淨土に往生させていたいくところの往生淨土であります。この往生淨土と



いふことも淨土眞宗において、たしかめられ成就された深い徹底であります。

最後に、「乃至十念」といふは、いのちのあらんかぎり、風につけ雨につけ、稱名して行く念佛生活であります、この念佛生活といふことも、淨土眞宗にいたつて如實に修行されることになつたなつかしい趣致であります。

これらの教義は宗教の眞實を全現されたものであります、しかるにかゝる尊いそして有難い特徴が如實に認識されず、また如實に實踐されないために、却つて人生を危くするものゝやうに批議され、あるひは不心得な人々が自らつまづくやうなことになつてをります、すなはち、他力廻向といふことをきいて生きる力を去勢するやうにおもひ、攝取罪惡といふことをきいて道德にそむくやうになり、

往生淨土ときいては現實の生活を忘れるやうになつてゐるやうであります、これはいかにも歎かましいことであります。

仍つて、私たちは淨土眞宗を如實に認識すると共に、如實に實踐して、この眞宗の尊さ、ありがたさを圓かに發揮しなくてはなりません。

### 他力の救ひ

まづ、他力の救ひといふことについて申し上げます。この頃では他力本願では駄目である、自力更生でなくてはといふ人々もあらはれます、それは他力の救ひといふことを淺薄に解釋して、いかにも人間の生きて行く光と力をうばひ、人生々活を去勢する魔術のやうに思ひこんでゐるのであります、けれども、これは云ふま



でもなく誤解であります、他力の救ひは他力の廻向によつて成就されるのであります、他力すなはち佛力を廻向して救ひたまふのであります、故に眞宗の信條は聖なる佛力を領解して生きかへるのであります、佛の力を享けて、佛と共に生き佛と共にはからせていたいくことであります。

われらの人生は、三層の生活輪によつて構成されてあります、外層は本能輪であります、本能によつて支配されてゐるのであります。次の内層は理性輪でありまして、理性によつて動かされてゐるのであります。そして核心をなす最深層は聖法輪であります、聖法によつて統整されてゐるのであります。この三層のうち本能も理性も、共に相対的な有碍の生命であります。有碍の生命であります

から、本能は福に活きるけれども禍にほろびます。理性は善に伸びるけれども悪に萎みます。こゝにおいてか、禍をとほして福となし、悪を轉じて善と成す絶對的な無碍の生命がなくてはなりません、この無碍の生命は聖なる法であり、尊い佛の力であります。この尊い佛の力をいたゞいて、煩惱づくめの人生のたゞなかに、白道を與へられて行くのが他力廻向の救ひであります。それであるから他力の救ひといふことは正しく生きる力を奪はれるのではなくて、聖い生きる力をめぐまれてたちあがることであります。

### 名號法の廻向と人生

佛の眞實は南無阿彌陀佛といふ聖なる法として廻施せられます。この南無阿彌



陀佛は信心となり念佛となり、拜む手となつて、私たちを救ひたまふのであります、一拜む手、稱ふる口、信ずるころ、みな他力なり」とはこのありさまを讃嘆された法喜であります。

佛を念じ、佛に念せられて行くところ、貪愛の波のうちにも、瞋嫌の炎のうちにも、一筋の白道がひらかれてまゐります、この白道を辿つてすべての人々は救はれて行くことであります、その先達として、萬人の典範として仰がれたまふのは善導大師であらせられました、「善導佛を念すれば、佛口より出でたまふ」と感歎せられたことであります、善導大師がお念佛なるとき、一聲一聲のお念佛が尊い佛となつて現はれたまふたといふのであります。この善導大師のすぐれた念

佛をほめたゝへて支那の智榮禪師が銘をものさされました。その銘は

善導阿彌陀化身

稱佛六字即嘆佛

即懺悔即發願廻向

一切善根莊嚴淨土

といふのであります。わが親鸞聖人は尊號眞像銘文に、この銘文を解釋せられました、要旨を抄録いたしますと、次のとおりであります。

稱佛六字といふは南無阿彌陀佛となふるなり。

即嘆佛といふは、すなはち南無阿彌陀佛となふるは、佛をほめたてまつるに



なるとなり。

即懺悔といふは、南無阿彌陀佛となふるは、すなはち、無始よりこのかたの罪業を懺悔するになるとまうすなり。

即發願廻向といふは、南無阿彌陀佛となふるは、すなはち安樂淨土に往生せむとおもふになるなり。また、一切衆生にこの功德をあたふるになるとなり。

一切善根莊嚴淨土といふは、阿彌陀の三字に一切善根をおさめたまへるゆゑに名號をとなふるは、すなはち淨土を莊嚴するになるとしるべしとなり。

私はこの銘文をいたゞくときに、めぐまれたる佛力が、いかに美しく且つ力強く私たちを生かしてくださるかをおもふて、感佩せず居れないのでありま

す。

### 嘆佛と懺悔

名號を信受して行くとき、それがおのづから佛をほめたてまつる嘆佛となり無始よりこのかたの罪業をあやまりはてる懺悔になるといふことは、趣のふかいことでもあります。嘆佛といふは仰いで聖い佛徳をほめたへることであり、懺悔といふは俯して罪ふかいわが身をあやまりはてることでもあります。このふたつの生き方によつて私達の生活はおのづから淨められ、おのづから高められるのであります。言葉をかへていへば嘆佛のこゝろは拜む手となり、懺悔のこゝろはあやまる手となります。兩手を合して拜むことのできる人、兩手をついてあやま



ることのできる人は、どんな場合にも正しく生き抜ける人であります。そして、拜む手はあやまる手となり、あやまる手は拜む手となります、嘆佛の生活は佛の聖徳をいよいよあざやかに仰がれると共に、自分のあさましさがいよいよ氣づかれて、おのづから懺悔のこゝろが深められるのであります。また、懺悔のこゝろに迫られて跪かずに居れなくなるとき、いよいよ佛徳がありがたくいたゞかれて嘆佛の法悦がゆたかになるのであります。

こうしたわけがありますので、いかなる宗教におきましても、聖化の方途として讃嘆と懺悔を規定し策勵するのであります。けれども、私たちのこゝろは淺間しく取亂れてをります、果して純なこゝろもちに嘆佛し懺悔することができま

せうか、こうした内省をふかめて行きますと、「無慚無愧のこの身」として悲嘆せられた聖人のおこゝろもちに觸れることができず、そこで名號をめぐみたまふ聖意がありがたく感じられます、めぐまれた念佛がひとりでに嘆佛となり、おのづから懺悔となつて下さるのであります。私たちが佛とひとつになるはからひとして禮讃と懺悔があるのでなく、佛が私たちとひとつになつてくださるによつて、自然の理として嘆佛となり懺悔となるのであります。

これでは念佛はどうして嘆佛となり懺悔となるかとまうしますと、念佛は信心の相續してゆくすがたであります、信心はめぐめたる智慧でありまして、罪ふかい私のありさまをみとゞけ、聖なる佛の願力を仰ぐ信知であります、そこで法



の深信は嘆佛となり、機の深信は懺悔となつて流露するのであります。これによつて念佛は私たちの加工とはからひを須ゐずして、不斷の讚嘆となり、常恒の懺悔となつて、私たちを眞實の生活にみちびきたまふのであります。

### 發願と廻向

このめぐまれた念佛は現實の人生を聖化するだけでなく、來世の淨土を要期せしむるのであります、すなはち「安樂淨土に往生せむとおもふ」發願のこゝろを興したまふのであります。

また、この念佛はたゞ自利のみちに局限されず、そのまゝ利他のみちとも展開したまふのであります、すなはち「一切衆生にこの功德をあたふる」廻向のみちと

ひらけてくださるのであります。

私たちの娑婆に對する執着は殆んど宿命的ななげきであります。この執着につながれてゐるために解脱がむつかしくなります、私たちはかゝる執着に纏はれながらも、聖なる法界をあこがれなくてはならないのであります、そこで佛が淨土を建立してください、これを願樂せしむることによつて、私たちを救ふてくださいるお思召をありがたく感佩しなくてはなりません。

淨土をあこがれるこゝろほど尊いものはありませぬ、こゝに滅びない生命のよろこびと永遠に生きて行く光をのぞむことができるのであります。

私はいつもこんなこゝろかけてをります、一日だけの一日をおくつてはい



けない、一生を内包とする一日を生きなくてはならぬ。さらに五十年たつたら滅びてゆく一日でなくて、永久に滅びることのない浄土への一日を歩ませていただきたいものである、こんなにくろがけてみると、日々の一步一步は永劫の大道を踏みしめて生かされて行く一步一步として底力があたへられてきます、そして浮世の名利と地上の愛慾にまどふ亂れくろのなかにも、安らかな清められた心境も仄かにめざめてくるかのやうであります。

ところが、無始よりこのかた迷ふてきたことでありますから、娑婆に執着するくろのふかい私たちは、尊い浄土を慕ふあこがれがうつくしくもちつゞけられないことも事實であります、くろにおいていたゞいた念佛が、おのづから發願

となつてくださるいはれを有難くおもふのであります。

また、娑婆に執着して浄土をわすれがちな私たちは、自分ひとりの生きることにだけに心を奪はれて、他人を生かす福祉については行届いた關心を有つことの稀な、かなしい私たちであります。つまり、大地に對する執着とひとしく、利己に關する執着がふかいために、動もすると生命を窒息せしむることになるのであります。

そこで、念佛は浄土をあこがれる發願となるいはれを具へたまふだけでなく、他人の利益を念ずる廻向のくろを賦與したまふのであります。

殊に、わが聖人の銘文における發願と廻向との解釋は意味ふかいものでありま



す、即ち發願を自利の核心となし、廻向を利他の中心と、かみわけさせられてあります。そこで、南無阿彌陀佛の名號に發願と廻向のいはれの具せられてあるといふことは、自利と利他との圓かに具足することを示されたのでありまして、大乘の菩薩の道がさながらに圓具されてある趣致を開顯なされた妙釋であります。

### 淨土を莊嚴する

最後に、念佛を稱ふるは淨土を莊嚴するといふことは、實におどろくべき光景であります。上の釋文に「阿彌陀の三字に、一切善根をおさめたまへるゆるに」と仰せられてあるとほり、この名號には佛の聖なる功德のすべてをこめて施與せられてあるのであります、そこで、念佛者は眞の佛弟子として、佛地を嗣ぐことで

あります。

わが親鸞聖人の行卷に、法照禪師の五會法事贊を引抄されてあります、そのうちに、右のやうな偈文があります。

此界一人念佛名

西方便有一蓮生

但使一生常不退

此華還到此間迎

とあります。これは、「この界に一人佛名を念すれば、西方にすなはち一蓮ありて生ず、たゞ一生つねに不退ならしむれば、ひとつのはなこの間にかへりいたりて



「迎ふ」とよむのであります。この世界にお念佛まうす行者がひとりあらはれたら西方のお浄土に蓮の花が一輪ひらく、その一輪の花はやがて行者を迎へにくる、といふ感嘆であります。洵にうるはしい風景であります。この點においても、念佛の行者は浄土を莊嚴することになりませう。

さらに、深めて味ひますと此の世における念佛の行人はそのまゝ浄土の聖衆に伍して浄土を莊嚴することになるのであります。

試みに日本の國土をかざるものは何物でありませうか、富士の山も莊嚴であり櫻の花も莊嚴であります、けれども、それにもまして尊い莊嚴は忠誠無比なる臣民であります、それとおなじことで、お浄土にも數かぎりなき莊嚴が具備されて

ありますが、とりわけて尊いのは浄土における聖衆すなはち菩薩方であります、佛と共に生き佛のおこゝろをうけてはたらきたまふ聖衆こそ、浄土の莊嚴であります。

ところが、この世において念佛をよろこぶ行人は、このまよひの世界にありながら、そのまゝお浄土の聖衆と同じ資格をめぐまれるのであります、「同一に念佛して別の道なき故に、遠く通ずるに四海のうちみな兄弟なり」と曇鸞大師が釋されたやうに、同一の念佛のうちに生かさるゝものは悉く兄弟である、同胞である、私たちは迷ひの凡夫であるが、この凡夫のうへにめぐまれたお念佛は如來の聖徳のあらはれであるので、そのお念佛の聖徳からから云へば、お浄土の聖衆



とおなじ資格を賦與されるのであります、もつと切實にいへば、念佛の行者は娑婆にありながら、淨土の聖衆と兄弟の契をむすばせていたゞきますので、淨土の聖衆が淨土を莊嚴したまふごとく、念佛の行人はそのまゝ娑婆にありながら淨土を莊嚴する身の上とならせていたゞくのであります。こうしてみると、念佛はわれらをたゞちに聖なる淨土に結びつけて下さる尊い生命の結紐となるわけであり  
ます。

### 眞佛弟子のはまれ

これは過分なほまれであります、勿體ないほどの榮光であります。かゝる尊いいはれを知らしていたゞくにつけても、私たちは、うやうやしく虔んで生活し

なくてはなりません。私たちの生活のあやまりはたゞ自分一人をけがすだけでなくて、やがてお淨土をけがすことになるのであります。こゝに念佛の行人としての敬虔な自重と身だしなみがなくてはなりません。私たちは凡夫の名によりて辨疏をついけてはなりません。淨土を莊嚴する聖衆の風格を感荷して精進しなくてはならないのであります。私の句に

### 白菊や佛にかしづく身だしなみ

といふのがあります、そしてかゝる身だしなみそのものが他力のめぐみであることをおもへば、洵に感謝しなくてはなりません。

かやうなわけがらをいたゞくにつけても、他力の救ひといふことは人生の活力



を奪ふことではなく、尊い佛の力をいたゞいて生きかへることを銘心して、うやうやしく精進させていたゞかねばなりません。

### 第三 講

#### 罪惡と救ひ

昨夕は他力の救ひといふことについて申上げましたから、今夕は進んで罪惡の救ひといふことについて申上げます。

さて、この罪惡の救ひといふことは、まことに深いお慈悲をいひあらはされたものでありまして、この信心のありさまをあざやかに釋顯してくださいましたのは善導大師であります。

善導大師は有名な觀經疏を御撰述あらせられて、そのうちに三心の釋をなされ



そのうちに深心といふことについてくはしく解釋なされました。その深信の解釋をくはしくいたゞきますと七深信六決定あるのでありますが、約めていたゞきますと、有名な二種深信といふのであります、二種深信といふのは法の深信と機の深信とであります。

### 機の深信

まづ、機の深信と申しますのは「決定して深く、自身は現にこれ、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと信ず」といふのであります、これはいかにも深刻な内省の智慧であります。多くの人々は安價な善人意識にはこつてをります、「私は刑務所に行くやうなことをした覺え

はない、だから悪人でない」といふ風に安心して居るのであります、けれども、いさゝかふりかへつてみると私は生きるために數かぎりのない生物のいのちをとつてゐるのであります、そればかりではない、わが愛する子供を生かすつもりで却てそのこゝろもちを傷けてゐることもありません、こんなに内省をふかめて行きますと、善導大師のおこゝろもちがうなづけるのであります。大師は「私は現につみふかい身である」と仰せられました、他人の罪を裁くことは容易であつても自身の罪を抉ることは深刻であります、さらに過去の罪をかたるものはあるが現前の罪を發くものは少い、この點において善導大師の機の深信は深刻であります、嚴肅であります。さらに現前の自身が罪ふかい存在であるだけでなく、過



去こにおいてもまよひをかさねてきた、また、將來しやうらいにおいても解脱げだつするだけの見込みこみはたゝない、實じつにどれだけの罪業ざいごふをもつてゐることやら、測はかり知しることはできないのであります。

かゝる罪惡ざいあくふかき業ごふを知らしていたゞけるのも、自力じりきの反省はんせいなどではできさうにないのであります、これは全く、めぐまれた信心しんじんの智慧ちゐによるものであります。

### 法の深信

次に、法の深信ほんしんといふのは「決定けつぎょうして、深く、かの阿彌陀佛あみだぶつの四十八願しゆじゅうはつがんは、衆生しゆじやうを攝受せつじゆしたまふこと、疑うたがひなく慮おもんびかりなく、かの願力がんりきに乗じやうじて定さだんで、往生わうじやうを

得うと信しんず」といふのであります、佛ぼつの本願ほんがんはまちがひなくかゝる罪つみふかい衆生しゆじやうを攝受せつじゆしたまふことを信しんずることゝろであります。

燈とうは自らを照てらすと共に他たを照てらすのであります、それとおなじやうに、佛ぼつは自ら覺さりたまふと共に他たを覺さらしめたまふのであります、それが自然じねん法爾ぽうにのことわりであります。そこで、罪つみふかき衆生しゆじやうを救すくふことが佛ぼつの本願ほんがんとして誓約せいやくなされた次第しだいであります、この聖化せいくわのちからによつて私わたくしたちは救すくはれるのであります。かくのごとく、信心しんじんは二種しゆの深信ほんしんであるといふことは、罪つみの救すくひを信知しんちすることとをあらはしたまふのであります。

この信心しんじんをのべて、わが聖人しやうじんの御持言ごぢげんにて「彌陀みだ五劫ごごう思惟しゆいの願がんをよくよく案あんず



れば親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐あらせられました、また「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と道破せられました。

### 杞憂と邪見

かゝる救ひ、即ち、「どんなに罪ふかいものでも、かならずたすける」といふことは、まことに宗教のふかい境地を徹底せしめられたものであります、大乘佛教の極致が力づくよみがき出されたことであります。

ところが、このあひだも、放送講座において歎異鈔を講本にして、いさゝか讚嘆をしたことではありますが、第三條の「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人

をや」といふところなどは一般の方には容易に理解されないと見えまして、それは「怪しからぬことである」といつてよこされた方も、すくなくありませんでした。かなり行届いて申上げたつもりでありましたが、「そんな信心は人間のうつくしい道徳性をきづゝけるものである」と秕議してよこされた方々も少数ではありませんでした。尤も、これは新しい疑難ではありませぬ。むかしからも、いろ／＼のかたちでくりかへされてきた疑難でありました、罪惡ふかきものを救ふといふ眞宗の信心が道徳を危くしないかといふ杞憂はかなり久しいあひだくりかへされてきました、否、それは杞憂といふだけでなくて、心得のわるい人々によつてあやまられ、悪いことをしても差支はないと云つたやうな邪見におち入り、造惡無碍



といふ異安心をかたちづくるやうになり、反道徳な生活の荒類をまねいたこともありました、現在の眞宗の信者といふ人々のうちにも、かゝるたぐひの邪見が行はれてゐるかのやうであります、少くとも、道徳的な緊張を缺くことになつてゐるやうであります、これは深く反省しなくてはなりません。

これは眞宗の信心に危いところがあるのでなくて、この信心を素直にいたゞかないところに躓きがおこるのであります。

### 超道徳と反道徳

眞宗と道徳との分化してゐるところをひとくちに要約して申し上げますと、眞宗の信心は道徳の規範を超越してゐるけれども、道徳の規範に背反するものではあ

りませぬ、道徳の規範は「廢惡修善」といふこと、即ち、悪いことをやめて善いことをするといふ相對的なものであります、ところが、こうしたことだけで、人生は解決しないところがあるのであります、言葉を変へていへば人生は道徳よりも大きい謎であります、惡を廢しなくては生き伸びられないことも事實であります、惡を糧として生活を支へてゐることも事實であります。こんな次第によつて道徳だけでは始末のできないのが人生であります。

そこで、さらに絶對的な統制が要請されるのであります、その絶對的な統制が宗教でありました、宗教の統制は「轉惡成善」といふことであります、即ち、惡を轉じて善と成すといふことであります、悪いことをとりのけて善くなるのでなく



て、悪いことを受け入れながら善くするのであります、この「轉」といふことは大乘佛教の妙趣であります、たとへてみると、柿はその澁をとりかけて甘くなるのでなくて、澁をうけ入れながらこれを變じて甘くなるのであります、これが「轉」の味ひであります。

そこで、道德の手のとどかないところを宗教が始末するのであります、これが宗教は道德を超越するといふありさまであります、道德よりも、もつと強い力を以て、高次的に尊き人生を統整するのが眞宗の救ひであります、

この宗教が道德を超越するといふことは、立場が分化されたのであります、決して、道德に背反するものではありません、たとへば、二階と三階のやうなもの

であります、三階は二階を超えてゐるのであります、二階に背いてゐるものではありません。

そして、宗教と道德とが人生を取扱ふ手法はちがつてをりますが、その究竟するところは「善」の實現といふことに合致するのであります。即ち、道德は「廢惡修善」をきまりとし、宗教は「轉惡成善」を利益とする、その相對性と絶對性と分別はありますが、「修善」といひ「成善」といひ、共に善の實現に歸するのであります。

わが親鸞聖人は御本典の信卷に、信心の現益として十種を列擧されましたが、そのうちに「轉惡成善」といふことを、かゝげてゐらせられます。



### 耳四郎の念佛

この「轉惡成善」の生きた實例として、味ひふかく注意せられるのは耳四郎のこととであります。

耳四郎は攝津のくにの弊島にひさしく住みなれた男でありまして、生れつきの善くない男であつて、山賊海賊、強盜窃盜、放火、殺害、ありとあらゆる悪いことをして荒みきつたどん底の悪人でありました。

この耳四郎が京洛に忍び入つて、悪事をはたらき、ある夜比叡のふもとなる白河の御坊の椽の下に身を潜めてをりました。

たまたま、白河の御坊には法然上人がおなりになつて、お弟子たちと共に、終夜、

ありがたい御法談をなさいました、椽の下に潜んで人の寝しづまるのを待つてをりました耳四郎はおもひがけない御法談を聴くともなしに聴いてゐるうちに、言々句々、はらわたに泌みつくのでありました、そして、「どんなに罪のふかいものも、生れつきのまゝで救ふて下さる本願の不思議」をきかされて、おどろいたのであります。わるいことのありだけをして、天にも地にも、身のおきどころもないことを感じてゐた悪徒が、かゝるあさましい悪徒でも救ひあげて下さる攝受の御手があらうかと、夜のあけるのをまつて、耳四郎は椽の下から這ひ出して、上人の御教化を仰ぐのであります。

法然上人は「宿縁もともありがたし」とお出遇ひなされて、「罪惡のふかい、障の



おもい凡夫は、たゞ佛の願力にすぎるよりほかはない、御本願のおまことをいた  
いてお念佛申せ」とさとされたので、耳四郎は生れてはじめてお念佛を申す身  
となりました。

### 悪魔の佛像

ところが、この物語をのせた拾遺古徳傳には「生得の報いなれば、ひごろのわざ  
すつるなし」とかいてあります、おもふに怖ろしい闇の力にひきづられ、念佛と  
なへながらも、なほ淺間しい生計をつつけてゐたものと察せられます、なんとい  
ふ怖ろしい矛盾でありませう、かなしい矛盾でありませう、けれども、この矛盾  
をとほしてふかく味ふべきものがあります。お念佛申しながら淺間しい生活をす

るといへば、いかにも念佛は力のよわいものゝやうにかんがへられませう。けれ  
ども、これを裏がへして、淺間しい生活をなさねば生きられないそくばくの業に  
からみつかれてゐる耳四郎の口からもお念佛があらはれて下さることをおもへば  
坐ろに力づよい無碍の念佛をたゝへずに居れないのであります。

耳四郎は念佛を申しながら、淺間しい生計をなさねば生きられない罪業をふり  
かへつてみて悩みつけけたやうであります、自分でさへどうすることもできない  
罪業ふかき身をなげ出したとき、いよいよ、罪ふかきものを、とりわけてあはれ  
みたまふ御本願を仰いで念佛を申したのであります、光と闇のもつゝたいな  
かに深刻な悩みをくりかへした耳四郎にも、やがて素純に生き抜く日がめぐまれ



てきました。

あるとき仲間の手合は耳四郎の悪事にたけて、その頭株になつてゐることを嫉み、耳四郎をなきものにせんと企んで耳四郎に酒をすゝめました、こんな怖ろしいたくらみがあらうとは知らず、耳四郎はこゝろよく酒をのんで酔ひつづれてしまひ、側にあつたものを被いで、前後もわきまへずに寝こんでしまひました、これを見すまして、敵手は劔をぬき、ひとおもひに刺し殺さうとして、上に被いでゐるものを拂ひのけた刹那おどろいた、おどろかずに居れなかつた、寝ころんでゐるのは耳四郎でなくて、金色の佛體でありました、そして出入の息は、一聲、南無阿彌陀佛とひゞいてくるのでありました。この思ひがけない光景にた

まげてしまつて、敵手は劔をなげすて、跪いて拜まずに居れなかつたのでありました「年來のあひだ、行住坐臥、時處諸縁をきはらず、念佛しけるゆゑに、この相現するにこそ」と奇異のおもひにうたれて、おぼえず耳四郎をよびおこしました、耳四郎はよびおこされて、これを知りおどろきました。このあさましい悪魔そのまゝの自分の寝姿が金色の佛像と化してゐたといふことをきいておどろき、これは全くとなへさせていたゞく名號の聖徳であると感動して、相手と共にその場で髻をきつてしまひました、そして、悪徒二人が生れかはつたやうに、ありがたい法師の姿になつて、ちいさな草庵をむすび、そのなかにしみじみとお念佛をよろこび合ふて、ありがたく往生の素懷をとげたといふことであります。



### 無碍の救ひ

これは轉惡成善の妙趣をあらはしたものであります、あさましい凡夫のころをそのまゝおきて、如來のよきおんころを加へて、よくしつらひたまふのであります。

この耳四郎のうへにあらはれた驚異、すなち惡魔の佛像こそ、惡を救ひたまふ本願の不思議、すなはち無碍の救ひをさとしたまふものであります。

悪いことをやめねば救はないといふ律法化でもありません、悪いことをしても差支はないといふ反道德でもありません、悪いことをやめようにも止められず、善いことをしようにもされない悲しい凡夫なればこそ、本願の力はそのまま攝め

とつてすてたまはないのであります。ところが、救ひにあづかつてみると平氣で悪いことをしておれないころもちがめぐまれて、おのづから悪いことをあやまりはて、善い生活をたしなまずに居れなくして下さるのであります、これが轉惡成善の妙趣であります。

そして、淨土眞宗の信心こそ、ふかい道德の立場となつて下さるのであります、一般の人々は善人のつもりになつて道德をほこつてゐるけれども、淨土眞宗の信者は罪惡ふかい身をあやまりはて、よいことをさせていたゞくのであります、善人のほこりによつて支へられるよりも、惡人であるといふ懺悔のうちによつて出づる善こそ素純であります。



こうしたことを考へてまゐりますと、浄土真宗の悪人を救ふ信心は、人生における最もすぐれた高次のな聖化でありまして、やがて、深い道徳をも培ふ心境であります。

### 往生浄土の大道

終に、往生浄土といふことについて、一言、申添へておきます。

私たちは浄土をあこがれるほどすぐれた存在でなくて、あくまで穢土に執着してゐるあさましい存在であります、浄土はさながら豚のまへに拒まれた真珠のやうに、若くは猫に捨られた黄金のやうであります、けれども、豚に愛せられないことによつて真珠に値打がないといふことが云へないとおなじやうに、私た

ちに愛樂されないからとて浄土に値打がないとおもふてはなりません。

否、かゝる穢土に執着して流轉をくりかへして居る私たちであればこそ、これを救はんとして、佛はお浄土を建立して下され、そのお浄土に生ずるみちまで廻向して下されたのであります。言葉をかへていへば、理想を有つことのできな

い凡夫に理想を與へ、理想を實現する能力のないものに理想を實現さして下されるのであります、實に行届いて救ひであります。この浄土に往生することによつて、おのづから迷を轉じて悟をひらかせていたゞくことでもあります、故に、救ひの究竟態はこの往生浄土の教によつて開顯されてあることに氣づかねばなりません。



### 現實を活かす理想

ところが、この淨土に往生することを目標とすることが、動もすれば、現實を無視することになることがあります、これはまことに、思ひがけないつまづきであります。

凡そ、理想を與へることは現實を忘れることでなくて、理想を與へられることによつて、現實はたかめられるのであります。それとおなじ道理でありまして淨土に往生する信心は現實の生活を疎略にするものではありません、ほろびてゆく現實に滅びない生命を賦與するものであります。この現實の生活が淨土への過程として轉化されたときに、うるはしい光とつよい力がおのづから與へられる

のであります。

信心の一念に、私たちは往生させていたゞく必然を信知するによつて、正定聚の位に即き、不退轉の力をいたゞくのであります。現前の一念から淨土への辿りがめぐまれるのであります。こうして、一步步々、お淨土に召されて行くといふ法悦ほど深いものはありませぬ、この尊い理想にみちびかれて、人生の一切の行動にも、聖なる綜合が感得されるのであります。

淨土は往生してわが境界となつたとき、ありがたいことは言語に絶するものであります、尙ほ、理想の境界として現前の生活をみちびくところにも、深い意味があるのであります。



こんなに、味あじつてみますと、他た力りきの救すくひも、罪ざい惡あくの救すくひも、往わう生じやうの救すくひも、宗しゆ教けうとしての本ほん質しつを圓まかに顯けん示じされたものでありまして、淨じやう士し真しん宗しゆこそ眞しん實じつの宗しゆ教けうであることが、いよく、明あきかに知しらされるのであります。

隨  
筆

- 一、興法利生
- 一、吉崎の追憶
- 一、佛にかしづくころ
- 一、最後の一步・最初の一步



## 興法利生

○ 「興法利生」といふことが、この秋における本派本願寺の宣傳標語としてえらばれました。宗教復興の機運に際して極めて適切な標語であります。

「興法」といふは「興隆佛法」といふこと、佛法を興隆するといふことであります。

「利生」といふは「利益衆生」といふこと、衆生を利益するといふことであります。

「法」を隆にすること、「人」を救ふこと、はひとつの營務であります。「法」は

「人」をとほしてかゝやき、「人」は「法」によつて生き伸びるのであります。

○ 「興法利生」といふことが、眼ざめたる生き方であり、本格的な工作であります。

眞實の法を愛樂すことは尊いことであり、衆生を救ふことはめぐまれたことである、こゝに滅びない生活がきづかれて行くことを信じます。

○ 「興法」といふことについてふたつの方法が見分けられます。即ち「説法」と「聞法」といふことであります。



「法を説く」といふことは、嚴格に云ひましたら、佛のみが法を説くことができ  
るので、人間には許されてないことでありませう。この點において、私はいつ  
も蓮如上人を偲ぶのであります。上人は「説教」とか「説法」とかいふことは仰せら  
れずに、「讚嘆」とか「法嘆」とか申されてあります。これは深く氣をつけなくては  
ならないことであります。

人間が驕つた態度で「法を説く」ことが、却つて「法をかくす」ことになりはしな  
いかを反省しなくてはなりません。そこで「法」を讚嘆することによつて全き「法」  
を仰ぐことができるといふことを忘れてはなりません。

そこで、佛の説法を如實にとりつぐことが、人間としての限界でありませう、

そして法を讚嘆し、法を聴聞することが、「興法」の素直な實踐でなくてはなりま  
せぬ。

○

ところが「聞法」といふことは容易であるかといふと、これまた氣をつけなくて  
はなりません。嚴格にいへば人には「説法」といふことができないばかりでなく  
て、「聞法」もできがたいのでありませう。私たちの耳は不仕合せな耳でありま  
して、悪口でもきくときは敬つのでありますが、法門をきくことになると鈍いも  
のであります。そこで私はいつでも親鸞聖人の尊い聞法をとほして、領解さし  
ていたいくことであると感じてゐるのであります。「聞く」ことは「みちびかれて



聞く」のであります、もつと深く味ふてみると、聞くことは「めぐまれて聞く」と  
とであります。

○

こんな、氣をつけてみますと、「説法」と「聞法」といふことも、深く反省を要  
するのであります、こゝに教主釋尊を仰ぎ親鸞聖人を慕ふのであります。教主釋  
尊によりて「説法」が成就され、親鸞聖人によつて「聞法」が成就されたのでありま  
す。この聖い人格をとほすことなくしては、この地上に興法が行はれないのであ  
りました。即ち、如來を拜み祖師を慕ふことが大切な「興法」の契機でありませう。

○

次に「利生」といふこともふたつにわかれます、即ち自利と利他とであります、  
自ら救はれること、他人を救ふことであります。

この自利と利他とは圓かな生活の全貌でありまして、これは別々に切はなすこ  
とができないのであります。燈の自ら照すまゝが他を照すやうに、自利するま  
ゝが利他するのであります。

そこで、自己の救ひを求むると共に、利他のみちに參加せず居れないのであ  
ります。

そこで、眞宗の信者は一人が一人づつお淨土へつれてまゐるやうに信じさせた  
いと心がけることが、せめてもの報恩であり、佛の攝化を助成するこゝろもちに



なりたいものです。かゝる倍加運動こそ「利生」の實踐として意味ふかいものであります。

○

いふまでもなく、自ら信じてお浄土にまゐる自利の道が佛力の廻向であると共に、他人をも信じさせて共に救はれて行く利他のことも、佛力のあらはれであります、この佛力のおんはからひに素直に身をさへて行くことが、利他の徳にかなふことであります。

それでありますから、われらは自ら信ずることがそのまゝ人を教へて信せしむる道になるのであります。仍つて、「利生」の道は自ら信ずることを力強い契機とするものであります。

○

わが聖人がかつて利生のために、三部經千部よまんと轉經のことをまなばれたこともありました。しかし、自信教人信の教語をいたゞいて、自ら信じて念佛をよるこぶことがそのまゝ教人信になることにお氣づきなされて、轉經のことをおやめになつたといふ記録ものこつてをります。

これは尊い指標であります。自ら信ずることが一切を信せしむることになる、なんといふ尊い妙趣であります。(昭和九年十月十五日)



## 吉崎の追憶

○ このほど、越前の吉崎に詣で、蓮如上人を偲ぶのでありました。

上人が「吉崎といふこの在所、すぐれておもしろき」ところであると親しんで、虎狼のすみなれし山中をひきたひらげ、一字の坊舎を建立せられたのは、文明三年の七月でありました。それから吉崎を退出して攝河泉に行化せられた、文明七年の夏まで、五年のあひだ、この吉崎に居住せられたのであります。

○ その頃の御坊の舊趾である山上にのぼつてみると上人がまごころこめてうちこまれた礎石は夏草のなかに埋まつてゐる。上人が「吉崎といふ、この在所すぐれておもしろき」と愛慕せられたやうに、南に山を仰ぎ北に海を控へて、北潟や鹿島や、いかにも風情の濃やかなところである。こうした趣ふかい自然がありがたい念佛の三昧境であつたのであります。

○ 終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる鹽越の松

濱坂の山のあなたにうつ浪も夢おどろかす法の音かな

鹿島山とまり鳥の聲きけば今日も暮れぬとつげわたるなり



草木さへ拂ひはてたる濱坂の嵐の音は南無阿彌陀佛

これらの御歌のなかによみ込まれた濱坂の山も、鹿島の杜も、さては鹽越の松もそのまゝ五月雨のなかに指呼される。自然はなつかしいものである。そして、自然は人生に融化されていよく風情をふかめてくる。とりわけて群生のいのちとして思慕される宗教的な聖者の舊蹟はいかにもなつかしいものであります。

○  
これらを慕ふて辿る巡禮の旅こそ宗教の實踐として、まことに意味ふかいものである。机の上に聖教をながめて理窟をあげつるばかりでは物足りない、しづかに合掌して古聖の足跡を慕ふことは今日においても大切な試みであります。

○  
吉崎別院に一泊して、蓮如上人の御影像を拜んでしみぐと感じたことは、無碍のいのちによつて圓成された人格のうつくしさであります。

○  
上人の相好はいかにも端正である、こゝろから微笑をもらしてゐられるやうである。物柔かな、温容はいかにも春風のなかに、のんびりとくらしてゐられるやうである。一生涯、劬勞をしたおぼえないやうな、涙をこぼしたことのないやうな、朗かな圓らかな、ふくやかさであらせられます。

○  
ところが上人ほど悲しい生涯のうちに始終されたお方はないのであります、



幼い頃に生母の方と生別されてからきびしい繼母にいちめぬかれたお方である、いくたりかの奥方にわかれて、腹ちがひの數おほき子女を撫養されたこともひととほりの苦勞ではなかつた、且つ、思切つた窮乏のなかに三度のお食事さへ缺かねばならぬこともあつた、召仕もなくてみづから子女のむつきを洗はれたこともあつたといふことである、さらに教界の迫害、社會の紛亂のなかに虐げられて、京にて殿堂を焼かれてから、生涯をとほして苦しめぬかれたのであります。

こうした苦惱と窮迫と虐待のなかに始終されたのであるから、どこかに暗いかげのこりさうなものであります。しかも、かゝる逆縁をそのまま、生命を培ふ糧として轉化されたところに、上人の生命がうつくしく光つて居ります。

宗教の心境はすなはちこれであり、なにもかもすべてのことを受け入れて、これを生きる道として轉化するのが救ひであります、涙のなかにも生命は光る、笑のなかにも生命は光る、「この人を見よ」上人はあらゆる苦しみと惱みのなかに、ほゝゑみたまふ。拜むものはその相好まで端麗となる。御光に觸れてすべてはうるはしく柔軟となる。尊い生命をめぐまれたものは生きるいきさつを何もかも受け入れて、そのまゝ人生を横に斷ちきつて法界を逍遙する。わが上人はその典型的な人格であらせられました。(昭和九年七月五日)



## 佛にかしづくころ

○  
廣如上人が、時衆に示された偈文のなかに「木畫尊像拜之如眞、一念往生信之如實、報恩稱名寤寐勿忘、謝德勤行晨昏勿廢」と仰せられてあります、まごころこめてお内佛に御給仕することは、聖胎長養のいとなみであります、お内佛の御本尊が生きてゐらせられることの、わかるのは法味愛樂の基調であります。

○

明治時代の妙好人として、床しく偲ばれる貞信尼は念佛して生き抜いた女性で  
ありました。

貞信尼が高臺寺の月眞院に佗居をしてゐられたときのこと。播州のいし女が訪  
れました。

「お國は」

「播州からまゐりました」

「播州かいナア、播州かいナア、一蓮院様の御國の人かいナア」

一蓮院の手鹽にかゝつて育てられた貞信尼は播州ときいたゞけでも、なつかしく  
感じたものと見えます。快くいし女をもてなしたのであります。そして抹



茶をたてかけた、茶碗の扱、帛紗捌き、いかにも手に入つたものである。いし女は感心しました。そして自分に呉れるのかとおもふてまつてゐました。すると一服たてるとくると廻つてお内佛へ供へて

「どうぞお薄ひとつ召し上げ」

と懇懃にお辭儀をいたしました。それからまた、一服たて、このたびはいし女に

「あなたも、どうぞ御招伴」

とすゝめたので、いし女は恐れ入つて肅然と襟を正したといふことであります。

○

また、真信尼がふるさとの友へおくつたたよりのなかに、御内佛を拜むで、念佛する心境を、ねむごろに書きつらねて居ります。

おつむりのなかのにつけいそうおがんで は なむあみだぶ

びやくごうそうおがんで は なむあみだぶ

「おつむりのなかのにつけいそう」とは頂上の肉髻相であり、「びやくごうそう」とは眉間の白毫相である。何れも三十二相のうちに數へられます。われらは白毫の恩資によつてお養ひにあづかつてゐるのであります。三十二相はすべて「おたすけ」を象徴するものでしみるゝと瞻仰しなくてはなりません。

○



ひだりのおまゆをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおまゆをおがんで は なむあみだぶ  
ひだりのおめをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおめをおがんで は なむあみだぶ

慈愛と叡智のこもつた佛眼ほど尊いものはありませぬ。そして、ありがたいことにはその佛眼はいつもこの私を視つめておてくださるのであります。

すべての人々から見はなされたとき佛の慈眼だけはいよくまごころこめて見まもつてくださる。またあらゆる人々を欺くことはできません。佛の慧眼だけは胡魔化すことはできません。佛眼は常に私をはなれない、つゝしんで照覽を仰

ぎ、うや／＼しく冥見をおそれなくてはなりません。

○

ひだりのおみゝをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおみゝをおがんで は なむあみだぶ

子供の聲には親の耳はそばだつものであります。佛の御耳は私のなやむ日の吐息も、よろこぶ夜のさゝやきも、どんなちいさな聲でもひとつも聴きもらしたまはぬ。

おはなをおがんで は なむあみだぶ  
おくちをおがんで は なむあみだぶ



ほとけの感官は何もかも、私のために敏活に働かされたまふのであります。とりわけて、その御心こそ私を招喚したまふのであります。

○

ひだりのおかたをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおかたをおがんで は なむあみだぶ  
ひだりのおてをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおてをおがんで は なむあみだぶ  
擧げたる御手は私によびかけ、垂れたる御手は私をすくふ、救済の印相を仰いで感謝せず居れない。

おむねをおがんで は なむあみだぶ

佛のお胸のなかにはこの私の姿がはつきり印象されてありませう。そして千々に思ひを砕いてくださるのであります。

○

ひだりのおひざをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおひざをおがんで は なむあみだぶ  
ひだりのおあしをおがんで は なむあみだぶ  
みぎのおあしをおがんで は なむあみだぶ

私は一步もお浄土へちかづくことはない、私の足は朝な夕な奈落へ向ふて



いそいでをります。かゝる私の救はれるのは佛の御足が私を追ふてくださるからであります。

おだいざをおがんで は なむあみだぶ

頂上の肉髻相から御臺座までにしづかにしみくと拜んでゐる貞信尼はいかにも床しい人であります。貞信尼の拜み方と比べると私たちは拜んでゐるのではなくて、慌しく瞥見してゐるにすぎないやうで勿體ないことでもあります。貞信尼のやうにほれくと拜み、しみくと拜みたいのであります。慌しい人生です、せめてはお内佛のまへに座つたときだけでも、心しづかに佛に親しみたいものであります。

○

なほまたごふしんもあらば なむあみだぶ

不審のたつとき、遠い京の友だちに手紙をかいて問ふよりも、近いお内佛のまへにさらけ出しておうかひなさいといふことでせう。取つくらず、ありのまゝ佛にからづくのが親しみのふかさであります。

ありがたきときも なむあみだぶ

うれしきときも なむあみだぶ

かなしきときも なむあみだぶ

しやうくのときも なむあみだぶ



ふじやうのときも

なむあみだぶ

はらのたつときも

なむあみだぶ

よくのころのおこつたときも　なむあみだぶ

いつでも、どんな生活せいこうのうちにもそのまゝ、ひとつになりきれるのは佛ぼつだけ  
であります、まことに無碍むげの法喜ほふきであります。

あさおきるにつけても

なむあみだぶ

よるところにいるときも

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

これが真信尼ていしんにの御おたよりの結末けつまつのことばであります。「朝あさな朝あさな佛ぼつと共に起おき、  
夕ゆふな夕ゆふな佛ぼつと共に臥ふす、」こゝまでくると、佛ぼつなくば生いまじ、法ほふなくば生いまじの法ほふ

悦わつはおのづからめぐまれます。まことに念佛ねんぶつの三昧境さいまいきやうであります。

(昭和八年六月十日)

## 最後の一步・最初の一步

慌あわたしくまたもや歳としはくれてゆく、

否いなな、歳としが暮くれて行くといふ感じかんじよりは、人生じんせいが暮くれて行くといふ感じかんじが私わたくし  
には自然しぜんに思おもひ浮うんでくるのであります。



私は、明治十八年の十一月の十一日、北國の磯にちかい町にうまれました、この十一月の十一日は恰度思出のふかい誕生日であります、これで満四十九年のあいだこの人生に生かしていたことである、今日から五十歳の第一日になるわけであります。人生五十とむかしから申されてある、そこで五十歳といふ自分の歳をしるしづけてみて、人生の黄昏に迫つてきたことをしみとくと感じるのであります。

○

私はこんなにながく生かしていたとくるとは豫想してゐなかつたのであります、それはどんな理由かはつきりわかりませんが、三十歳まで生きられたらと

おもひ、三十五歳まではとても生きて居れまいとおもふたこともありました、それでいつのまにやら四十歳を越したとき自分ながら不思議な位でした、こんな風に短命の豫覺をもつてきたわけ、こゝに五十歳になつてみて、おかげさまでながいあひだ生かしていたといふ感じがふかいのであります。

○

ながいあひだ生かしていたこととおもふて、深いめぐみを過分にいたいたことを感じて、おのづからあたまがさがります。

そして、かぎりなき御恩をいたいて、こんなにながく生かしていたときながら何ひとつ報謝のいとなみもなさず、却つて、罪をかさね、過をくりかへして、



いたづらにあかし、いたづらにくらしてきたことを、ふかく慚愧するだけであります。

ふりかへつてみると、いろ／＼の感慨も次から次へと紛れてまわります、そして、悔恨もあり、遺憾もある、その他、いろ／＼の複雑なこゝろもちもつれて來そうである、しかし、それらをすべて、うけ入れながらしみ／＼と掌を合してお念佛申すより外はないのであります。

しみ／＼とお念佛すれば、嘆佛のこゝろ、懺悔のこゝろがはつきりあらはれてまわります。

○

これからさき、どれだけ生かしていた／＼ことやら、それは全くわからない。しかし、一日でも多く生きて、あれも、これも、仕上げてみたいといふ気分も強くなります、これが生の執着といふのでありませう、年をとればとるほど生の執着がふかくなつてくるやうにも感じられます。

ところが、それと同時に、そんなに執拗な念願をもつことは遠慮しなくてはならない、こんなにながらく生かしていた／＼いて、それ以上のことをおもふのはつしまなくてはならないと自分で自分をさす氣もちもする、そして、それを素直にうなづく氣もちもいたします。

○



こうしたころのもつれのなかに、はつきり浮んでくるのは、「最後の一步」といふころもちであります。

この「最後の一步」を意識するとき、なんとなく心持も分限相應に浄められてくる。私は素直にこの意識をふかめて人生の黄昏をころしづかに愛樂したいとおもふのであります。

○

「最後の一步」をふむころにも、なほ執念ぶかい名利のころがからみつかうとする、何といふあさましいことでありませう、何といふ怖ろしい業でありませう、聖人の仰せられました「そくばくの業をもちける身にてある」といふおこと

ばが、ふかく感じられてまいります。

ころしづかに、あやまり果て、せめては「最後の一步」なりとも、許されてあるだけ、身分相應におちつける生き方をさせていたゞきたいとおもふことであります。このことをおもふとき、いさゝかころもちも浄められてくるかのやうであります。

○

「最後の一步」といふころもちのうちには、おのづと緊張した力もめざめてきます、そして、しみじみとした深いころもちで人生が見直されてくるし、いつのまにやら行手のお浄土が仄かにしのばれてきます。そして、この「お浄土への辿





---

昭和九年十二月二十五日印刷 定價貳拾錢  
昭和十年一月一日發行 送料貳錢

著者 梅原真隆

京都市堀川通本願寺

發行者 筒井葆銳

京都市西洞院七條南

印刷者 内外出版印刷株式會社

代表者 須磨勘兵衛

---

京都市堀川通本願寺  
發行所 佛教青年會聯合本部

---

京都市油小路正面上ル  
發賣所 興教書院  
振替口座大阪一〇八一五番

---

「最初さいしよの一步ほ」といふことに氣きづかせていたやくとき、いつしか、「最後さいごの一步ほ」がそのまゝ  
「最初さいしよの一步ほ」といふ感かんじがいたします。(昭和九年十一月十一日記)



終

